

## 「今やあらわされた奥義」

詩 篇 第50篇4節～7節  
ローマ人への手紙 第16章17節～27節

説 教 岡村 恒牧師

ローマ人への手紙は、締めくくりの部分にかなり長い頌栄を記しています。25節から27節までは初代教会の讚美歌だと言われ、日本基督教団信仰告白もその内容を受け継いできた頌栄でもあります。

2年前の2010年1月、『これがわたしたちの主』という説教題で1章1節の頌栄から読み始めました。キリストの使徒パウロが神に召された者として、救いとは何かということに集中するようにして語り続ける言葉を聞いてきました。私たちはこの手紙を〔大阪教会人への手紙〕として受け取り、『パウロが立っている場所に、私たちも立つようになる』ことを望み見てきました。礼拝のたびに、今ここにいる自分に向かって神さまご自身が語っておられる、そういう信仰を持って聞き続けてきました。

ローマの信仰者たちが迫害や困難の中で、パウロから慰めを受け、信仰の核心を握りしめたように、私たちもまた励まされてきました。最後の挨拶で、初代教会の人々が『主にあって』互いに励まし合いながら歩んでいる姿を目にしました。続いてパウロの傍らの人々の名前が上げられます。奴隷の名前だろうと言われる名前もあれば、比較的裕福であった家の教会の中心人物の名も挙げられています。ただ信仰によって結びつけられた群れがありました。そして一番最後に、神をほめたたえる頌栄を記しながら、信仰の核心部分をもう一度、明確に記します。

パウロが「わたしの福音」(25節)と言う時、それはパウロ独自の教えといったものではなく、主イエスご自身に関わる教えのことを指しました。初代教会に紛れ込んできた様々な誤った教えをひとつひとつ排除してきたパウロは、「わたしの福音とイエス・キリストの宣教」という一つの恵みだけを語り伝えます。神によって与えられた約束の言葉によって本当の救いを得、命を得ることができる、ただこの一点を「わたしの福音」と呼んで語ります。ただ主イエスの教えと業、十字架の出来事によって「今やあらわされ」た「奥義」だけが、私たちを救うことができるのです。イエス・キリストを救い主として信じ、イエス・キリストに結びつけられて新しく生きる、この福音だけを語ってきました。

日本基督教団は、2,000年後の極東の地で、

なお、同じ福音をそのまま受け継いでいます。『日本基督教団信仰告白』の第2段落はこう始まります。『イエス・キリストによりて啓示せられ、聖書において証せらるる唯一の神は、…』。つまり、私たちが唯一のまことの神に出会うことができるのは、ただイエス・キリストの啓示により、聖書の証によるのです。このようにして私たちにご自身をお示し下さったお方だけが、私たちに真の命を与え、力づけることのできるお方です。パウロが讚美したのと同じ仕方、私たちも神に出会い、神を讚美しています。

聖書は私たちに、神をほめたたえて生きたら良いと勧めます。世界を造り、はじめと終わりをお定めになったお方だけが、まことに神であられ、唯一の知恵をお持ちのお方です。神は永遠から永遠におられます。このお方は、私たちを愛し、私たちを握り締めておられます。ひとり子、イエス・キリストを代償としてまで私たちに命を与えて下さったお方です。

本来なら、死んで葬られ、やがて神の前で裁かれて滅びるはずの私たちを、「わたしの愛する子」と呼んで下さるために、神は御子の命までもお与え下さいました。また、「わたしは、彼らに永遠の命を与える。だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、彼らをわたしの手から奪い去る者はない。」(ヨハネによる福音書10章28節)という主イエスの約束も、いつまでも変わることがない確かな約束です。永遠から永遠にいますお方の約束だからです。主イエスが命がけで与えて下さったこの約束を完成するために、主イエスは今も働き続けておられます。パウロは、この救いから私たちを引き離すものなど何もない、と確信をもって宣言してきました。(ローマ人への手紙8章38節、39節)

ローマ人への手紙は、大声で叫ぶように神をほめたたえて結ばれます。初代教会以来、代々の教会もこの讚美を口に、私たちを救わずにはおかない神の愛をほめたたえて歩んできました。変わらないお方の約束を聞いている私たちも共に、同じ信仰を持って、同じ讚美歌で神に感謝し、神を讚美して歩みましょう。

(記 岡村 恒)